

サハリン事務所現地レポート

2019年6月

(件名) 日露文化芸術フェスティバル 2019

報告者：主査 出野 翔大

サハリン州内6都市にて開催した「日露文化芸術フェスティバル 2019」について報告する。
本フェスティバルは、在ユジノサハリンスク日本国総領事館及びサハリン州の主催、北海道庁の共催により開催したもので、日本からはステージ公演やワークショップなどに総勢44名の文化芸術関係者が参加した。
日露による文化フェスティバルは、昨年9月にもユジノサハリンスクで予定されていたが、開催前日に発生した胆振東部地震の影響で日本側の参加予定者のほとんどが渡航できず、ロシア側出演者だけで実施されていた。今回、北海道からはステージ公演にYOSAKOIソーランチーム、ダンスグループ、和楽器グループの3チームが参加したが、中には昨年9月に渡航できなかった方々もあり、「サハリンに来ることができる日を待ち望んでいた」との声も聞かれた。

オープニング公演は、5月31日にユジノサハリンスク市で開催され、日本側として北海道チームのほかにボーカルユニット、洋楽器演奏、同志社大空手道部が参加、ロシア側からも伝統的なダンスグループやバレエグループ、音楽グループなどが出演し、満席の観客を魅了していた。

ユジノサハリンスク市以外でも、アニワ市・ネヴェリスク市・コルサコフ市・ドーリンスク市・ホルムスク市において、それぞれステージ公演や日露関係の写真展、風呂敷や着物着付け、アニメのワークショップなどを開催し、多くのロシアの方に来場いただいた。ステージ公演では言語を越えてステージ・観客が一体となった盛り上がりを見せ、ワークショップでは逆に我々日本人がロシア人から日本とは違った風呂敷の包み方を教えてもらうなど様々な交流が進み、盛況の中でサハリンでの「ロシアにおける日本年」は締めくくられた。

また、今回日本の若い世代が参加した事により、InstagramなどのSNSでは非常に多くのサハリンに関する情報が投稿されており、このような若い世代の交流は様々な方にロシア・サハリンに興味を持ってもらえる機会となることも実感した。今後も引き続き幅広い年代・分野の交流を進めていきたいと考える。



YOSAKOI チーム



オープニングステージのフィナーレ



Instagram の投稿

(件名) 樺太出身のろう者による 78 年振りの故郷訪問

報告者：主査 長谷川 さゆり

樺太出身のろう者である村川健雄氏が、6月11日から17日の期間サハリンを訪問し、当事務所においても支援を行ったので報告する。

村川氏は昭和7年に樺太の知取町(現マカロフ)で生まれ、「樺太豊原聾啞学校」に通っていたが、昭和16年に「札幌聾啞学校」に転校、その後、小樽にて就職し、現在は新得町で暮らしている。

ろう者という情報を入手しづらい環境のため、サハリンへの渡航は規制されていると思っており、故郷の訪問をあきらめていたが、ご息女が渡航可能である事を知り、ろう者の支援団体「UPTAIN」の協力のもと、78年振りの訪問が実現したものである。

当事務所には、日本サハリン協会経由でUPTAINから協力要請があったもので、村川氏の来所にあたっては、豊原時代の詳細な住宅地図や鳥瞰図、戦前と現在を比較している写真集などを用意し、当時の様子を思い出していただくためのお手伝いをした。

村川氏は地図や写真を見ながら、「当時の様子が非常によく再現されていて、子供の頃の記憶が次から次へと溢れ出てくる。駅の建物も当時のものとよく似ていて大変驚いた。」と、寄宿舎での生活、駅で先生と待ち合わせをして学校に通っていたこと、遠足の思い出等を懐かしそうに語ってくれた。

事務所訪問の後、サハリンの街を歩きながら、現在は空き地となっている「樺太豊原聾啞学校」の跡地を訪問したとのことであり、後日同行者からは、「事務所の協力により学校の場所が判明し、今回訪れることができ本当に良かった」とのメールをいただいた。

78年振りに故郷を訪れ、自分がこの地で生まれ育ったという証を探したいという村川氏の思いに少しでも応えることができたのではないかと考えており、今後もこのような樺太関係者の支援に取り組んでいく。



左から二人目が村川氏